

## 『韻鏡』 「開合」臆解(追補)

太田 斎

### 仙-宣分韻についての補足

仙-宣分韻している文献には他に『説文解字篆韻譜』(以下、『篆韻譜』と略称)がある。太田斎 2016, pp.158-162 で『古文四声韻』(pp.162-164)と共に韻目を掲げていたのを迂闊にも失念していた。「『韻鏡』 「開合」臆解(補)」ではこれを挙げておくべきであった。そこで(追補)として、これにも言及しておくことにした。

周知の如く、『篆韻譜』には5巻本、10巻本がある。いずれにおいても平声のみ分韻している。本稿で議論の対象としている箇所に関しては僅かな字体の違い以外に5巻本、10巻本両者に差異は見られない。今、天理図書館善本叢書所収5巻本に基づく。分置状況は以下の通り。

	仙韻	宣韻
滂 A	「偏：芳連反」	
明 A	「緜：莖(武)延反」	
幫 A		「鞭：卑沿反」

上田正 1976 に拠れば、滂 A の反切は切三、王一、広韻に一致。但し帰字は「篇」。王三は「偏：芳連反」。明 A は帰字を含め、広韻と一致。切三、王一、王三は「綿：武連反」。幫 A は切三、王一、王三、広韻いずれも「便：房連反」、P014-3 背のみ「便：苻連反」。「鞭：卑沿反」は他書に例を見ない。所拠韻書が上字が軽唇音であることを嫌って音和切に改め、その際に下字も合口字に改めたものか。或いは独自にかく改めた可能性もあるか。この3字そしてその分置状況は『古文四声韻』と一致する。但し『古文四声韻』の方には既に見たように反切は附されていない。

今、天理図書館善本叢書『篆韻譜』解題には、王国維の考証によれば、10巻本は徐鍇(920-974)の編集した初稿、5巻本は兄徐鉉(917-992)が増補改訂したものとされる、とある。生卒年の情報は太田が補った。『篆韻譜』、『古文四声韻』いずれも成書年が不明であるが、徐兄弟と夏竦(985-1051)の生卒年を比較すれば、『説文解字篆韻譜』の方が早いことは明らかである。いずれも字体の辞書であり、韻書の韻目で分類している点も同じである。後者の宋紹興乙丑(1114)齊安學社本は上声しか残っていないので、確たることは言えないが、『古文四声韻』の平声仙-宣韻に於ける唇音の分置状況が『篆韻譜』と一致するのは、この分韻を取り込んだ結果なのではないか。恐らく齊安學社本は『篆韻譜』同様、平声だけは分韻していた。平声に於ける小韻分置の杜撰さを見ると、韻書を所属小韻の細部に至るまで丁寧に参照したとは考え難い。『古文四声韻』に僅かに見える反切を『篆韻譜』と比べて見ると、『篆韻譜』の「轟：式連反」が「轟：式延反」となっており、宣部の「次：敘延反」が同様に宣部にあるが、「次：夕連反」となっている。ちなみに『広韻』では「次：夕連反」で、『古文四声韻』と一致しているが、切三、王一、王三では「涎：敘連反」。「次」は

「涎」の異体字である。なお『篆韻譜』仙部には「涎：夕連反」が別にある。「涎」は『広韻』には見えない。『集韻』だと「次：徐連切」小韻所属で、「《説文》“涎，嘆也”」とある。どちらにしてもこの小韻は開口韻の仙部に置くべきであった。今、何故『篆韻譜』に邪母開口小韻が二つ存在するのかということは議論しない。逆に、『篆韻譜』「全：疾縁」、『古文四声韻』「全」（反切無し）はどちらにおいても仙部に置かれるが、合口の宣部にあるべきものである。少なくとも仙-宣分韻に関しては『篆韻譜』、『古文四声韻』どちらも杜撰と言わざるを得ないが、総じていえば、その程度は後者が上回る。『篆韻譜』にせよ、『古文四声韻』にせよ、何らかの切韻系韻書に基づいたのであれば、小韻及び所属字の所収状況、配列順は当然、似たようなものになるだろう。先の仙-宣韻における唇音字及びその分置が完全に一致していることを以て、後者が前者を参照した結果と直ちに断定することはできない。但し既に述べた如く、P2014 と比べると細部まで参照したとは言えない。P2014 以外にも仙-宣分韻した韻書があり、それは分韻が不徹底なもので、両書がそれに拠った結果という可能性もあるが、そのような残巻は現存しない。たとえあったにせよ、韻書であるからには両書に見られるほどの不徹底はないだろう。所属字の分置に関しては P2014 と大差は無かったはずである。やはり両書は韻目以外は所拠韻書に厳密に従わなかった。字書であるが故にそれが許されたと考えるのが自然であろう。

もし上、去声で分韻している韻書が見出せないのはそれは偶然ではなく、そしてそもそもそのような韻書は存在しない、ということであれば、北京図書館蔵宋刻配抄本などに見られる上声の（稚拙な）分韻もまた必ずしも韻書を参照した結果ではなく、仙-宣分韻を仄声にまで拡張しようという『古文四声韻』改訂における独自の初歩的試みだったとも考えられる。

#### テキスト

『集韻』（上海図書館蔵述古堂影宋抄本），上海古籍出版社，1985，上、下（索引）  
『説文解字篆韻譜・詳備碎金』天理図書館善本叢書 漢籍之部 6 所収 5 巻本，天理大学出版部，1981，pp.1-448（解題・小川環樹 pp.1-6）